ま え が き

イギリスの国立公文書館（PRO）所蔵の日本・東南アジア関係史料の存在を知ったのは1979年のことであった。オーストラリア国立大学で開かれた東南アジア史に関する研究集会でたまたま隣席したマードック大学のジェームズ・ウォーレン（James F. Warren）教授の御教示による。以来，PRO 史料への渇望は募りつつも，機会を得ぬまま数年が過ぎた。したがって，86年秋，学術振興会の助成を得てはじめてそれらの史料に接することができたときは大きな喜びではあったが，同時に，あまりにも膨大な文書の山を前にして，いったい何からどのように調べていったらよいのか途方に暮れたというのが偽らざる心境であった。何らかの手引書の必要を痛感した。幸いにして，1989年４月から90年３月の１年間，アジア経済研究所の海外調査員としてロンドンでの在外研究の機会を与えられ，再び PRO に足を運ぶことが可能になった。１年という時間は必ずしも十分なものではなかったが，ある程度史料の検索，取扱いに習熟し，PRO の日本・東南アジア関係史料の全貌がおぼろげながらも見えたような気がした。これを機に，自分なりの手引書を作ってみようと思い立ち，できあがったのが本書である。

ソ連の解体による東西冷戦の終焉，日米摩擦の深刻化，世界各地における民族問題の噴出など，いま世界は明らかに戦前期的構造を露出しつつある。一方，アジアに眼を転じれば，EC 統合，北米自由貿易協定（NAFTA）などへの対抗措置として「東アジア経済協議体」（EAEC），「アセアン自由貿易地域」（AFTA）といった地域主義の動きが高まってきている。「大東亜共栄圏」という負の歴史を継承する日本はこれらの動向にどのように対処していったらよいのか。日本の自己規定と国際社会における位置づけがいまほど問われている時はあるまい。その意味でも，日本・東南アジア関係の歴史的研究はますます重要性を増しているように思われる。拙く不完全な手引きで

はあるが，本書がそうした研究を進めるための一助になれば幸いである。

なお，杉山伸也（慶應義塾大学），石山昭次郎（前早稲田大学）両氏からは本書の作成過程で貴重な助言をいただいた。記して謝意を表したい。

1992年２月

清水　元